JVC Japan International Volunteer Center

330 | 2018 春

［￥500］年4回発行

TRIAL & ERROR

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）

［特集］気仙沼での復興支援事業終了

被災地での住民の生活と自治を支えた7年間

［解説］混乱招くエルサレムへの米国大使館設置

トランプ発言がもたらすパレスチナでの混乱

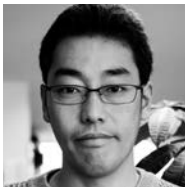
［報告］『南北コリアと日本のともだち展』報告

国家関係が悪くとも市民と市民とが交流する

2018年3月20日に開催された「感謝のお別れ会」。浦島地区振興会と大浦、小々汐、梶ヶ浦の各防災集団移転協議会の共催で、6年間に渡り浦島地区へ通い続けたアドバイザーの皆様と、3月末で撤退するJVCへの「感謝のお別れ会」を開催していただいた。

被災地での住民の生活と自治を支えた7年間

2011年3月11日に発生した東日本大震災から7年が過ぎた。
JVCは震災直後から被災地の宮城県気仙沼市に入り、
生活再建、地域づくり、仮設住宅での自治体制の支援などの
復興支援を展開してきたが、
2018年3月末をもって事業を終了する。
事業終了にあたり、この7年間でJVCが何に取り組み、
それが地域住民にどう寄与したのか、
そして、JVCが直面した課題を報告したい。



住民に寄り添った7年間。そして見えてきた課題

JVC気仙沼事業統括　岩田 健一郎

JVCは2017年度末をもって7年間携わった宮城県気仙沼市での復興支援事業を終了した。住民の生活再建に一定の目処がつき、地域づくりを住民自ら進めていく段階に至ったと判断したからだ。住民の思いを形にするまで住民に寄り添い続けた活動と自負するが、被災地で進む「住民不在の復興」に対してその復興政策を問い、改善するには至らなかったという課題は残した。それを今後の同様の支援活動に活かすため、7年間を総括する。

JVCがしてきたこと

JVCは発災後から約10日経った2011年3月20日に初動調査を開始し、先行して現地入りしていた他の国際協力NGOとのつながりを頼りに気仙沼を活動地として定めた。

それまで国内災害では、地元NPOなどに間接協力するだけだったJVCが直接支援に乗り出したのは、大規模かつ深刻な災害を前に、理屈を超えて何かしなければならないと考えたこと、また、海外での復興支援の現場で直面してきた課題（援助の偏重、人々の自立を損なう支援など）が同様に生じると予測されるなかで、住民主体の復興を支えることに意義を見出しからだった。

JVCが気仙沼での活動の入り口として選んだのは、地元の社会福祉協議会が立ち上げた災害ボランティアセンターの運営支援だった。全国から集まったボランティアと住民ニーズをマッチングする活動に、社協職員とともに寝食を忘れて奔走し

◎注1…大浦（おおうら）・小々汐（こごしお）・梶ヶ浦（かじがうら）・鶴ヶ浦（つるがうら）の四集落の総称。別名、浦島地区。
◎注2…本段落は、「データで見る復興の状況（平成30年1月末日現在・気仙沼市）」に基づく。

小々汐（こごしお）の高台移転参加者が「まちづくりルール」について検討を進める様子。「まちづくりルール」の検討に当たっては、JVCの派遣する専門家が模型や図面を用意し、適宜アドバイスを行った。

た。

約4ヵ月間の運営支援に区切りをつけた後、8月にはJVC気仙沼事務所を開設し、市内鹿折（ししおり）地区、特に四ヶ浜（しかはま）地域（注1）での生活再建支援を開始した。地域の実情を把握するための全戸訪問活動を皮切りに、住民との対話を重ね、被災した家屋の清掃や養殖業の再開支援など様々なニーズに対応した。

これらの活動を通じて住民と顔の見える関係を築くと、四ヶ浜で進んでいた高台移転の住民協議会から、建築・まちづくりの専門家の派遣との依頼を受けた。高台移転は誰も経験したことがないだけに、住民は「自分たちの要望をまとめて行政に伝える」、震災前の広い敷地から限られた土地に集住することで「まちづくりのルールを策定する」、住宅建設費が高騰するなかで「自宅をできるだけ早く安くつくる建設方式を

いまだに厳しい気仙沼市の現実

気仙沼市では昨年５月に全ての災害公営住宅が完成し、高台移転も８割以上完了するなど、住宅の再建が進んできた。住宅再建の進展に伴い、仮設住宅の解体工事が徐々に進められている。主要産業である水産業は魚市場の水揚金額が震災前の９割近くまで回復した。

一方、いまだ８００人以上が、仮設住宅やいわゆる「みなし仮設」（行政借り上げの賃貸アパート）での暮らしを余儀なくされている。震災時７万４０００人余りだった人口もこの７年間で１万人近く減少し、年間の観光客は震災前の半数程度に留まるなど、厳しい現実に直面している（注2）。

大浦地区高台移転の造成地見学会。大浦地区では大規模な造成工事が進められたため、高台移転が完了するまでに6年以上の期間を要した。現在、住民は住宅再建を果たし、生活に落ち着きを取り戻している。

導入する」必要性に迫られていたからだ。

建築家に協力を求めた結果、6人の建築家からなるアドバイザーチームが結成され、高台移転が完了するまでの間、およそ月一度の頻度でアドバイザー派遣を継続した。JVCは、住民のまちづくりと家づくりをアドバイザーとともに支援した。

仮設住宅や災害公営住宅でのコミュニティづくり

住民が生活再建を果たすまで、仮設住宅での暮らしを支えることも重要な活動であった。

仮設住宅の入居開始当時の課題は、住民の孤立を防ぐためのコミュニティづくりだった。JVCは、行政と連携して仮設住宅の自治会づくりをサポートし、地元の支援団体と協働で住民の交流場を設けてきた。

仮設住宅での生活が2年、3年と長期化し始めた頃には、特に高齢者の体調不良が懸念されるようになり、保健分野の専門機関と連携して、生活習慣の改善やメンタルケアの講話、介護予防体操、健康に関する個別相談（血圧・脈拍測定を含む）など心身の健康維持活動に取り組んだ。

四ヶ浜にある浦島小学校は、震災の影響で児童数が減少したことで13年3月に閉校した。地域の衰退に危機感を募らせた住民が中心となり同年4月に「浦島地区振興会」が発足し、JVCもサポーターとして以後約5年間、住民とともに、小学校施設の利用方法を見出すべく廃校利用に関する先進事例視察や勉強会を重ね、養殖業の魅力と震災の教訓を伝える体験型ツアーを実施するなど、地域づくりの活動に取り組んだ。

17年に入り、鹿折地区に市内最大284戸の災害公営住宅が完成。各地から入居者が集まる災害公営住宅では、住民同士のつながりも希薄にならざるを得ない。阪神淡路大震災の被災地においても復興住宅の孤独死が大きな問題となったため、JVCは、行政や地元の支援団体と連携し、災害公営住宅のコミュニティづくりをサポートしてきた。コミュニティの土台となる自治会結成を目指して、自治会の担い手探しや活動計画の検討を住民と進め、昨年10月に無事自治会が発足した。

2017年10月29日に開催された鹿折南住宅自治会設立総会。市内最大規模の284戸からなる災害公営住宅「市営鹿折南住宅」の自治会設立総会が開催され、自治会が正式に発足。JVCはこの公営住宅が完成する以前から入居予定者の顔合わせなどを実施し、入居開始後も自治会設立に向けた話し合いなどを手伝ってきた。

JVCが直面した課題＝住民不在の復興

JVCの気仙沼での最後の活動は、四ヶ浜の住民有志によるNPO法人の立ち上げ支援であった。

人口減少と高齢化が進む地域を活性化するため、外部から人を呼び込むことでの交流人口の拡大を団体設立の目的とした。事業計画の立案に始まり、法人化のメリット、デメリットの検討を重ね、親子を対象とした、釣りや磯遊びを体験するトライアルのツアーも実施した。事業計画と規約の内容を固めたが、あと一歩という段階で突如辞退者が現れたことを契機に、有志メンバーの間で法人設立を躊躇する声が相次いだ。結果的に任意団体の発足に留めることとなり、当初目標であったNPO法人設立を果たすことはできなかった。

気仙沼で直面したのは、震災で浮き彫りとなった「地域の衰退」とい

旧浦島小学校の施設利用について考えるワークショップの様子。会合に参加した住民は廃校活用の先進事例について学ぶとともに、小学校施設の利用方法についてアイディアを出し合った。

う日本社会が抱える問題であった。地域が右肩上がりの発展を望めない状況で、住民とともに新たな価値を見出し地域を活性化することをＪＶＣは目指してきた。しかし、住民が切実に求めているものは、かつての暮らしを取り戻し、それを守ることに他ならなかった。

ここに、ズレが生じていたように思う。地域を活性化するという取り組みにおいて、真の意味で「主体」がいなかった。「主体なき活動」は成り立たない、気仙沼での活動はその事実を改めて私たちに教えてくれた。

この「ズレ」の問題は、復興政策のあり方にも共通している。国は東日本大震災の甚大な被害を受けて、「災害に強い地域づくり」を復興政策の基本方針に掲げた。その方針に則って、沿岸部を「災害危険区域」に設定して居住を禁じ、安全な土地を確保するための高台移転とかさ上げを推し進め、総延長４００キロに及ぶ防潮堤を整備しようとしている。今後の災害に備えて、防災・減災対策を講じることは確かに重要である。ただそれは、住民の生活再建との現実的なバランスの中で進められるべきである。ここには明らかに大きなズレがあった。

高台移転の過程で元の集落に戻ることを断念した住民の無念の思いに触れ、盛土された土地が活用されずに広がっている光景を目にする度に、私たちが常に考えるのは「あまりに時間がかかりすぎている」ということである。これまで防災、減災のための公共事業に注ぎ込まれてきた膨大な資金と時間をもっと個別の支援に振り向けたならば、住民の生活再建はより早く、望ましい形で実現していたはずである。

こうした「住民不在の復興プロセス」が進展する中で、ＪＶＣが最も大切にしてきたことは、住民が生活再建を果たすまでの困難な道のりを支え、その思いを形にするまで寄り添い続けることであった。この点において、私たちは果たすべき役割を全うしたと考えている。しかしながら、ＪＶＣが復興政策そのものを問い、それを改善するまでには至らなかったことは率直に認めざるを得ない。このことは、今後の支援活動における大きな課題として、私たちに突きつけられている。

住民主体の復興を実現するために

気仙沼市はこの2月、向こう10年間を期間とする「第2次総合計画」を策定した。これは市の最上位計画として、まちの将来像や施策の方向性を示すもので、私も審議会の委員として18年2月まで計画策定に関わってきた。これまでの総合計画がいわゆる「行政計画」だったのに対し、今回の計画は市民、地域・事業者、行政三者の主な取り組みを示す「公共計画」として位置づけられている。本計画の下に、気仙沼は人口減少や少子高齢化などの課題と向き合っていくことになる。この計画が実のあるものとなるためには、市民や行政それぞれが「主体」となって、実践に取り組むか否かにかかっている。その行く末を見守り続けたい。

一方、ＪＶＣは、大規模な国内災害に対する支援計画の策定を進めてきた。この計画には、東日本大震災の経験が反映されている。今後の災害の現場において、住民主体の復興を実現するための政策と支援活動が広く展開されるよう、気仙沼での活動の経験を共有し、それを活かしていくことが必要であると考えている。

JVCの事業終了に寄せて、住民からのエピソード

気仙沼事業担当　横山 和夫

2017度末をもって気仙沼での復興支援事業終了するにあたり、7年間の活動を4名の住民に振り返っていただいた。4つのエピソードは、行政ではなくNPOだからこそ実現できた支援が、住民の目線からはどう評価されていたのかを語っている。

ワカメの刈り取りを体験するツアー参加者たち。浦島地区振興会とJVCの共同企画である養殖体験ツアーは合計9回実施され、100名以上の参加を得た。震災の教訓を伝えることもツアーの重要な目的の一つであった。

尾形（おがたたけし） 健 さん

浦島地区振興会会長。「浦島地区振興会」は、活気ある地域の実現を目指して2013年4月に結成された自治会などで構成される団体。JVCは振興会と共に、旧浦島小学校の施設利活用検討や、地域資源を活かした養殖体験ツアーなどを実施してきた。

JVCには、震災直後から7年間に渡りご支援いただき感謝しています。

浦島地区のコミュニティ再生については、行政が手が回らないなか、JVCが尽力してくれました。浦島地区の規模は小さくなりましたが、以前のように住民同士仲の良い地域を保つことができました。これが一番うれしいことです。

熊谷（くまがい）和裕（かずひろ） さん

大浦地区防災集団移転協議会会長。浦島地区の大浦、小々汐、梶ヶ浦の3集落では、防災集団移転（注1）に向けた「防災集団移転協議会」が結成されるが、熊谷さんは大浦地区協議会の会長を務めた。JVCは専門家から成るアドバイザーチームを結成し、住宅再建が完了するまで現地派遣を継続した。

防災集団移転については、アドバイザーチームとJVCには感謝の言葉しかありません。防災集団移転のアドバイザー派遣は合計40回にも及びました。その間、住民の意見を取りまとめることは大変難しかったと思いますが、アドバイザーには本当に粘り強く取り組んでいただきました。

また、JVCにはアドバイザーの紹介から資金面での支援まで大変お世話になりました。浦島地区では3地区で防災集団移転が行われましたが、これらがすべてうまく進んだ理由は、やはり「人」だと思います。JVCには本当に良いアドバイザーを紹介してもらったと思っています。

2013年6月に仙台などで実施した住宅地見学会が印象に残っています。先行事例を見学することで、まちづくりや住宅建設の具体的なイメージをもつことができました。また、3地区合同で見学会を実施したことで、3地区が一致協力しながら防災集団移転に取り組んでいくための大きな一歩となりました。

小松チヨ子 さん

浦島地区（鶴ヶ浦地区）住民。JVCとの関係が一番強い地域住民の一人。養殖体験ツアーのなかで行った「鶴ヶ浦まちあるき」でも

◎注1…被災地にあって、居住に適さない住居（原則10戸以上）集団的移転を促す事業。
国は地方公共団体に事業費の4分の3を補助する。

2017年8月20日に開催された「夏のワクワク体験inうらしまがっこう」。浦島地区の有志が中心となり、敷島製パン労働組合組合員とそのご家族向けに、磯遊びや釣りの体験型ツアーを開催した。

案内人を務めていただくなど、JVCの日々の活動でも多くの協力をいただいた。

避難所になっていた鶴ヶ浦生活文化センターへの給水活動が、JVCとの最初の出会いでした。震災直後の鶴ヶ浦生活文化センターでの避難所暮らしという、一番大変な時期に励ましてもらい大変感謝しています。当時、文化センターには大勢の住民が避難していました。しかし、同じ地域でお互い顔見知りだったため大きな混乱もなく、皆で団結して頑張ることができました。

避難所生活のなかでは、JVCが11年6月に企画した蔵王への温泉旅行が印象に残っています。神経が張り詰めているなかで、ほっとする時間となりました。また、JVCとのつながりで農園（三里塚わんぱっく野菜）から野菜を送っていただきました。避難所から仮設住宅へ移っても野菜の支援は続きました。

また、津波で流され絡まってしまっていた漁網をときほぐす作業を、JVCにつないでもらって災害ボランティアセンターに依頼し、延べ700名ものボランティアに行ってもらいました。皆、泥だらけになりながら最後までやり切ったことも印象に残っています。その時のボランティア数名とは今でも連絡を取り合っています。

塚本（つかもと）卓（たかし）さん

気仙沼まちづくり支援センター長。「気仙沼まちづくり支援センター」は13年7月にNPO法人「気仙沼まちづくりセンター」内に設けられた組織。市から受託した「まちづくり総合マネジメント事業（専門家派遣事業）」を運営し、JVCが行った防災集団移転アドバイザー派遣もこの枠組みを利用。11年から続く被災者支援や復興に関する情報共有・連携協働を目的とした「気仙沼NPO／NGO連絡会」の事務局も担当。

震災前には市民活動の経験はなく、震災後にJVCと関わるなかで支援とはどういうものなのかを考えさせられました。なにかを「してあげる」ことが多いなかで、JVCは目先のことにとらわれない活動していたと思います。仮設住宅におけるコミュニティ形成では、「住民に任せる」というJVCの姿勢に地元団体のなかから不満が出ることもありましたが、自分自身は住民が支援への依存体質になってしまうのは問題だと感じていました。

気仙沼まちづくり支援センターの「専門家派遣事業」も、JVCと一緒になってしくみを作り上げ、それが現在でも活かされています。

JVCの職員と朝まで酒を酌み交わしながら活動についてまじめな話をしたことが懐かしい思い出です。そこから得られるものも大変多かったです。JVCの存在は、第三者の視点として大いに意義があったと感じています。

いまさら聞けないQ&A Vol.10

読者のみなさんからの 質問募集中!! 会員担当:宮西までお寄せください。

事務所でのランチもつまんで食べます

Q 内陸国であるラオスには海がないけど、どんな食生活を送っているの?

A 水田や畑で作るコメが主食。あとは野菜やキノコ、果物、川で捕れる魚など。町のレストランに行けば、ベトナムから運ばれる海産物を使った料理も食べられます。

東南アジアと言えば、コメ。明けても暮れてもほとんど例外なく、どこでもこれを食べています。日本で馴染みのある田んぼで作るコメだけでなく、山がちなラオスでは畑で作る陸稲（リクトウまたはオカボと読みます）の栽培も盛んです。森を伐り開いて焼き払い、種をまく焼き畑という方法が用いられます。こうしてみると、畑という字が「火」と「田」の字からできている意味がわかりますよね。かく言う日本もラオスと同じ国土の70%が山地で、昔はたくさんの陸稲が作られていました。

主食のコメについて大きく違うのは、日本はウルチ米が主なのに対し、ラオスではモチ米が中心だという点です。日本のお赤飯がそれにあたるのですが、もう少し水気がないかな。品種にもよりますが、ほとんどの日本人にとってはとっても美味しく感じられるものです。蒸籠（せいろ）で蒸したコメを竹で編んだ籠に入れ、みんなで入れ替わり手を入れて取ってはギュッと握り、おかずをひょいとつまみとっていっしょに口に投げ込む。これをなんと、一人あたり消費量で世界で2番目に食べている（日本は50位）。

コメ以外では、村の暮らしでよく食べるのは野菜。家の周りに植えたり森から採ってきます。オススメは5月から10月にかけての雨季のタケノコとキノコ。ほんとうに美味しい！ 果物が好きな人にとっては、3月から6月にかけて、マンゴーをはじめとして実に様々な果物が次から次に実をつけます。このほか魚や貝、カニなどは川で捕ります。鶏や豚肉はご馳走。

ラオスの人はまだ多くが農村に住み、こうした自然の恵みとともに日々の暮らしを送っています。しかし近年の開発政策の下、大規模な森林破壊が進み、木は売られ、跡地に広大なプランテーションができたり、鉱山、ダム開発が進められています。この過程で村人の土地が補償なしに奪われたり、農薬や薬品の排出、ゴミの投棄による汚染などで食料確保が難しくなったり、村人の健康への被害が心配される事態が頻発しています。日本のように法律も整備されていないし、何が起こっているか説明しようにも村の地図もない、環境に関する記録もない。ないない尽くし。

JVCラオス事業では、村人の暮らしを守るために、村の範囲や土地利用を示した地図を作ったり、彼らの生活が森とともにあることを示すための記録をとったりしながら、開発による大きな変化が起きそうになった時、起きた時に、まずは村人自身が、そして開発に関わる人たちが、村の状況、起きていること、それらに対する村人の権利などについて理解し、村人が主体となって地域開発に自分たちの意見が出せるような仕組みづくりを支援しています。

ラオスは内陸国ですが、JVCの活動するサワンナケート県は国道で東に向かえばすぐにベトナムの港があるので、県内のレストランなどでは海鮮料理もふつうに食べることができます。意外ついでにもう一つ。街では毎朝通りのあちこちでフランスパンが山積みにされ、特製のパテを塗ったうえに野菜や蒸した鶏肉などを挟んだそれはそれは美味しい「カオチー」というサンドイッチが売られています。ラオスにお越しの際はぜひお試しください。

（ラオス事業担当　木村 茂）

スタッフの
ひとりごと

猫と生きるのニャ

地域開発グループマネージャー／南アフリカ事業担当　渡辺　直子

イラスト　かじの倫子

前回このコーナーに登場したのが10年前。この間、代わり映えのしない自分の人生における唯一の変化が、当時1匹だった猫が思いもよらず（？）7匹に増えたことだ。どの子もわが子のようにかわいく、以前に増して出不精になった。しかしそこは「招き猫」、世界は狭くなんかならない。以前、猫が脱走したときに一緒に探してくれたり励ましをいただいたりと、ご近所さんとの素敵な出会いがあった。今でも道ですれ違うと立ち話をする仲が続いている（ちなみに猫は無事帰還、現在も健在）。

海外出張時には、JVCのボランティアさんやスタッフ、知人が朝晩交替で7匹の世話に来てくれる。お互い顔を合わせないそんな彼女たちの間で、「猫のお世話引継ぎメモ」がいつしか始まった。帰国直後にそれらを読むと全員の温かい人柄が心にしみ、長旅の疲れも癒される。自分がいかにたくさんの人に支えられているかを知り、感謝の気持ちが増すばかりだ。こんな出会いとつながりは猫がいなければ無理だった。

さらには人生の深みも得た（気がする）。つらい目にあっても誰も恨まずただ生きようとし、年老いてはジタバタせずに死を迎えるその姿からは、「シンプルな生」の力強さを感じ、わが人生のあり方を考えてみたりもする。「大切な相手」が死にゆく過程を受け入れ、向き合っていく時間は、つらくともかけがえのないことも教えてくれた。

…とここまで書いて、本稿を読んだJVCスタッフらの呆れ顔が目に浮かぶ。でも猫はJVCが目指す「平和」についても大事な示唆をくれるのだ。猫が心穏やかに暮らせる社会なら、人間も安心して生きられる世界に違いない、と。

コネタにゅーす　活動地雑学

イラクの「女子会」とお酒事情

イラク事業担当　池田　未樹

「これを5人で空けました〜」と、女性スタッフがある日自慢げに見せてくれた「女子会」の写真には、7本のワインボトルが。さすがは酒好きなJVC女性スタッフたち。

イラクとイランの国境にあるザクロス山脈。ここは世界最古のワインの産地のひとつで、ワインは中東が発祥地です。さらにはビールもメソポタミア、つまりイラクが起源とされています。さらにもうひとつ、中東のお酒と言えばアラク。ナツメヤシの実やブドウを原料としてつくられる強いお酒で、水を加えると白濁します。イラクやシリアが産地です。

日本国内では「◎◎酒造」「◎◎ビール株式会社」と、いかにも「お酒を作っていますよ！」という企業名が通例ですが、一方のバグダッドにあるアラクを作る酒造会社の商品ラベルには、「made in Iraq by modern chemical industries」と、単に製法（？）が書かれていました。マーケティングなど気にしない、いい意味でまっすぐなネーミングです。

そしてイラクの女性。こちらは日本の女性たちと同様おしゃべりが大好きです。しかしイラクでは「女子会」の時にアラクやお酒を飲むことはなく、甘いお菓子やケーキを食べながら「女子会」をするそうです。JVCの女性スタッフがイラクに行くと、「女子会」ならぬ「ストレス会」になってしまうかもしれませんね。

「エルサレムはイスラエルの首都」発言があった後の金曜礼拝の後、ダマスカス門前で行われたデモの様子。パレスチナ人たちは「エルサレムはアラブのもの」と声を合わせる。

［解説］混乱招くエルサレムへの米国大使館設置

トランプ発言がもたらすパレスチナでの混乱

昨年末、トランプ米大統領が米国大使館のエルサレム移転を公式に発表した。移転時期は今年5月と宣言されている。エルサレムをイスラエルの首都と認めていない国際社会が反対や懸念を表明しているのは報道されている通りだが、パレスチナ現地ではこの問題はどう受け止められているのか。現地の声を紹介する。

右：エルサレム事務所 現地代表
山村 順子

左：パレスチナ事業 東京担当
並木 麻衣

国際社会の努力を蔑ろにするトランプ発言

トランプ氏が米国大統領に当選してからというもの、パレスチナの人々が漠然と抱き続けてきた不安がついに実体化してしまったのは、2017年12月6日のことだ。

この日、米国から全世界に向けて、「エルサレムはイスラエルの首都」認定と、それに伴う米国大使館のエルサレム移転が公式に発表された。さらに今年3月には、大使館移転をイスラエル建国70周年記念となる今年5月に実施することが宣言されている。米国政府が自画自賛し、イスラエル側からは「歴史的な決断」と称えられたこの行動は、一方で国際社会が積み上げてきた多くの努力を覆し、パレスチナ側の人々を暗澹たる気持ちへとたたき落とした。

3つの宗教の聖地であり、どの宗教の教徒にもアクセスの保障が大切にされてきたはずのこの街は、1948年以降、分断、占領という大きな混乱の中に置かれてきた。67年には第3次中東戦争で勝利したイスラエルがエルサレムを占領し、80年に「エルサレム基本法」を制定、そこに暮らすパレスチナ住民ごと、東西エルサレムを統一された首都として宣言した上で実質管理している。

この一方的なイスラエルの動きに、国際社会は制止できないまでも、細心の注意でエルサレムを取り扱ってきた。国連では80年の安全保障理事会478号決議で、イスラエルの首都宣言を無効なものとしている。

米国では95年に、テルアビブにある米大使館を99年5月末までにエルサレムに移転する準備をすると定めた「エルサレム大使館法」が上・下院を通過し、実際に大使館用地も西エルサレムに購入された。だが、クリントン元大統領からオバマ元大統

「エルサレムはイスラエルの首都」発言があった後のガザでのデモの様子。タイヤを燃やすのは、黒い煙をあげることで、自分たちの怒りをイスラエル側に伝えるため。

領に至るまで、実際の移転は大統領の拒否権で止められてきた。

その理由は、聖地エルサレムの帰属に関する中立性をひとたび崩してしまえば、あまりに多くの人々を刺激し、和平の機運さえ失われてしまうためだ。実際に首都認定以降、現地では衝突が続き、百人以上のパレスチナ人が負傷している。パレスチナの人々から感じられるのは、大国の都合に翻弄されることへの憤りや悲しみである。

トランプ発言の背景にあるもの

今回、トランプ大統領が首都認定に踏み切ったのは、米国内で今年11月に行われる中間選挙をにらんでのことだったとみられている。

国内人口の約3割を占め、米国最大の宗教勢力ともいわれるキリスト教福音派の多くは、イスラエルの存在がキリスト復活にとって重要であると考えているという。つまり今回の騒動は、選挙公約であった首都認定を実行に移すことで、岩盤支持層として福音派を保持しておくことが狙いであった。

そんな事情を裏に隠し、口では「和平」「交渉」と繰り返し、国連では強硬な態度をとった挙げ句、難民の生活を支える国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）への支援を半分も実質上削減した米国に対し、パレスチナの人々がもつ不信感はもはや拭いようがない。

現地の声。「アメリカも自分たちの政治的リーダーも信じない」

東エルサレムの男性がこう口にするのを聞いた。

「エルサレムから遠く離れた場所に住み現地を何も知らないトランプという人間が、勝手にエルサレムを首都と宣言して、UNRWAへの資金もカットした。そして彼は『和平を望んでいないのはパレスチナ側だ、交渉のテーブルにさえつかないのだから』とまで言う。大使館移転でさらに問題は増えるだろう。アメリカにこう言いたい。『今まで長い間ありがとう。僕たちも和平の仲介者を別に探すし、もう君たちのお金も施設も不要だ。だからもう、一切関わらないでもらえないか?』と」。

この米国の動きに対し、JVCは12月16日、現地NGOネットワーク「AIDA」が発表した米国への懸念の声明を紹介し、さらに26日には日本政府に反対の意思表明を求める要請文を公開した。また国際政治に翻弄され、埋もれがちな現地の人々の声を少しでも日本に届けるため、12月21日に緊急イベントを行った。

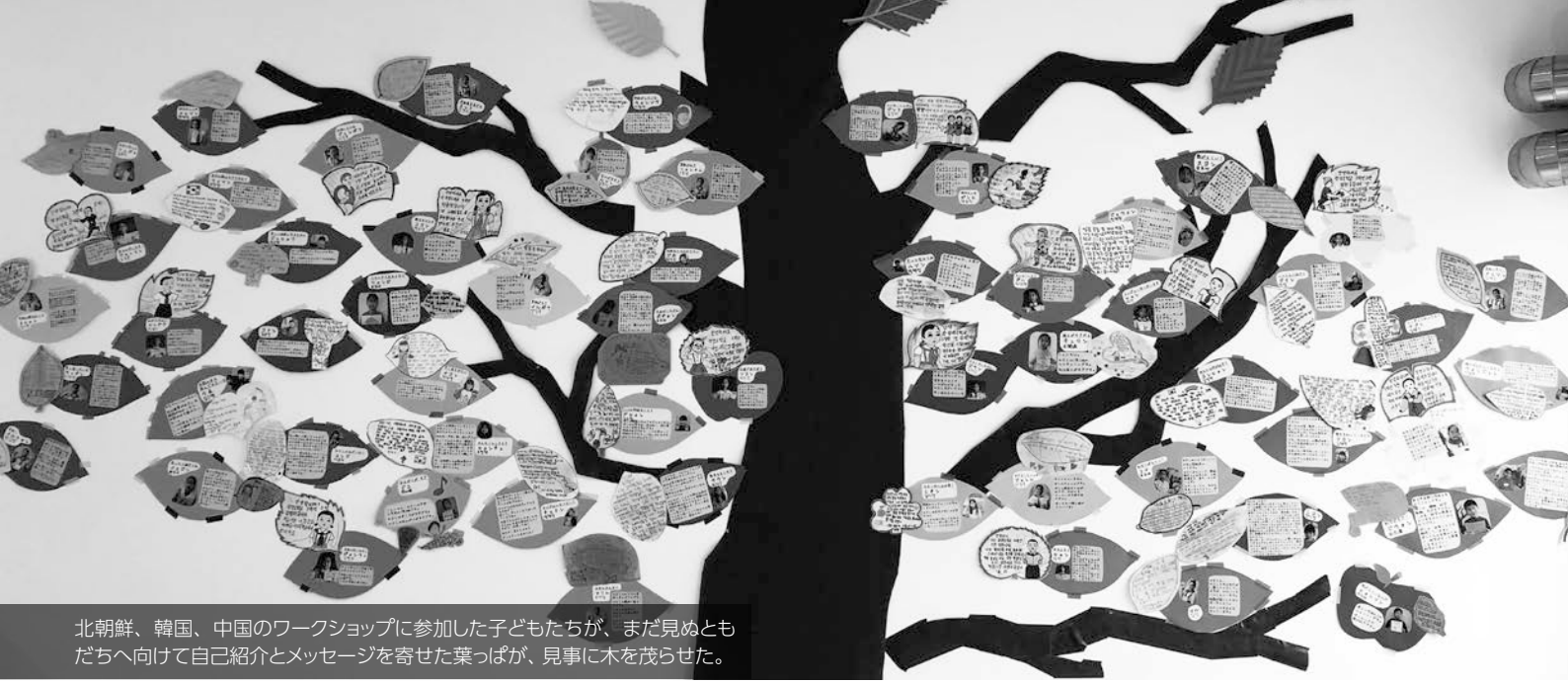
当日は一時帰国中の現地代表・山村が現地の人々とテレビ電話を繋ぎ、現地駐在員の井川が撮り溜めた現地インタビュー映像を流し、ますます困窮する人々の声を参加者へと直接届けた。オスロ合意は失敗だったと、アメリカをもう和平の仲介者とは思えない、ガザの貧困が悪化している……など、現地の声を本人の口から聞くことができて良かったという参加者の声が多く聞かれた。

自治政府ですら自分たちの味方ではない

人々の憤りは大国だけでなく、汚職や内部抗争、占領への加担の疑惑が後を絶たない自分たちの政治的リーダーにも向けられている。ガザではこんな声を聞いた。

「生活なんて呼べるものもない今、もう失うものはないのだから、何か変化が起きるまで私たちは闘う。私たちの政治的リーダーですら一般市民の味方ではないのだから、変化を創れるのはインティファーダ（民衆蜂起）しかないと思っている」

国際政治の潮流に翻弄され、頼るべきリーダーも持てず、自分たち自身の未来への決定権を持てない人々からは、深い悲しみや孤立感、諦めも感じられる。本来は第一の当事者である人々を取り残してしまわぬよう、微力であっても聞き取りを続け、ニュースの表舞台から消えつつあるエルサレム問題について、JVCから発信を続けたい。



北朝鮮、韓国、中国のワークショップに参加した子どもたちが、まだ見ぬともだちへ向けて自己紹介とメッセージを寄せた葉っぱが、見事に木を茂らせた。

［報告］『南北コリアと日本のともだち展』報告

国家関係が悪くとも市民と市民とが交流する

平昌オリンピックで盛り上がりを見せていた2月16日から18日の3日間、『第17回南北コリアと日本のともだち展』が東京で開催された。大韓民国（以下、韓国）、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）、日本、そして在日コリアンの子どもたちの絵をひとつの会場に展示することで互いを紹介し合い、相手を知ることから始まる平和づくりを目指した活動だ。政府と切り離した市民交流の今を報告する。

広報／ファンドレイジンググループマネージャー
宮西 有紀

国家関係が悪いときこそ大切な市民同士の交流

韓国、北朝鮮、日本、そして在日コリアンの子どもたちの絵を一つの会場に展示する『南北コリアと日本のともだち展』（以下、ともだち展）は、国によっては、国交がなかったり、今も戦争状態が続いている、こ

こ東北アジアで17回開催してきました。

ともだち展の実行委員会に参加しているJVCは、国際協力NGOであり、世界10ヵ国と東日本大震災の被災地で活動をしています。そんななか、いざ私たちが住む「東北アジア」の平和を考えると、日本もその「当事者」であることに気づかされます。

2017年は「わたしの楽しい時間」をテーマに、各地から自分の好きなひとときを描いた作品が集まり、およそ150点が会場を飾りました。北朝鮮からも「宿題が終わったらゲームをします」「ごはんの時間を忘れちゃうこともあります」という、きっとお母さんに「ご飯よ！早く来なさい！」と呼ばれる姿が目に浮かび、思わずクスッとしてしまう絵もあります。

特に米朝の緊張関係が高まった17年。8月に入ると日本国内では北朝鮮の脅威がメディアで喧伝されるようになりました。相手の顔が見えないことが不安を煽る。恐怖を感じるから相手を知ろうともしない。この繰り返しがますます相手への不信感を募らせる悪循環を生みます。こんなときだからこそ、「相手を知る」ことから始まる市民同士の交流が重要で、ともだち展は、子どもたちが描く日常から「その光景が目に浮かぶ」、また「その姿を想像できる」ことでお互いに関心をもち、尊重しあうことが未来を開く鍵になると考

◎注1…「絵の中に入って東アジアのともだちと遊ぼう」というワークショップでは、各国の子どもが描いた絵の中から、一番気に入った絵や行ってみたい場所が描かれた絵を子どもたちに選んでもらい、「その絵の中にいる自分」を描いてもらう。それを切り離して、その場所に自分の絵を貼り付けて、「絵の中に入り、ともだちと一緒に遊ぶ」体験をするというもの。

会場となったアーツ千代田3331は、廃校となった中学校を利用したアートセンターで、ギャラリーなどが集まる。ともだち展も子どもたちの等身大自画像や「大きくそだてみんなの木」が窓を飾った。

えています。

平壌にも普通の暮らしがある

5年前からは、平壌外国語大学で日本語を学ぶ学生と日本の学生との日朝大学生交流がスタートしました。会報誌328号（14～15ページ参照）、でも報告済みですが、17年は日本の大学生が訪朝団に同行出来なかったため、実行委員会の訪朝メンバーが大学生からメッセージや手紙を預かり訪朝しました。

その動画や手紙を読んだ平壌外国語大学の学生も日本の学生に向けて「まだ若いから機会がたくさんあると思います。そのときは、今の気持ちを込めてもっとたくさんのことを言い合いたいって思っています」「今は離れていても、お互いに今後頑張って、来年きっと会えるよう祈っています」などのメッセージを送りました。今回、彼らが話している動画を会場で映したところ、多くの方が足を止めて映像に見入ってくださり、涙を流している人もいました。

今年のプログラムは、平壌のほか、中国や韓国での活動を紹介する報告会も実施し、その中で、訪朝団の一員として渡航した平和研究者の水本和実さんは、「平壌にも普通の暮らしがある」「国家関係が悪いときこそ、純粋な文化交流が必要」と、政府と切り離した市民交流の役割として、ともだち展の意義と可能性を説きました。

また、ギャラリートークでは、13年にともだち展の平壌訪問に同行し、17年は4回にわたって現地を取材したフォトジャーナリストの林典子さんをゲストに迎え、林さんが出会った人、目にした風景についてお話を伺いました。林さんは、北朝鮮を「〝個人〟が伝わりにくい国」と表現し、「取材を通して関係が深くなるなかで見えてくる〝個人〟が大事」で、ともだち展の活動も「信頼関係」があってこそ続いてきたものであり、そういった面でご自身の活動と似ている部分があるとお話しされていました。

「平和をつくる」と子どもが理解する

会場で展示したのは絵だけではありません。「大きくそだてみんなの木」では、北朝鮮、中国、韓国で行われたワークショップ（注1）に参加した子どもたちが葉っぱに書いた自己紹介を展示し、色とりどりの葉っぱが木を茂らせ、来場者も子どもたちのメッセージに見入っていました。

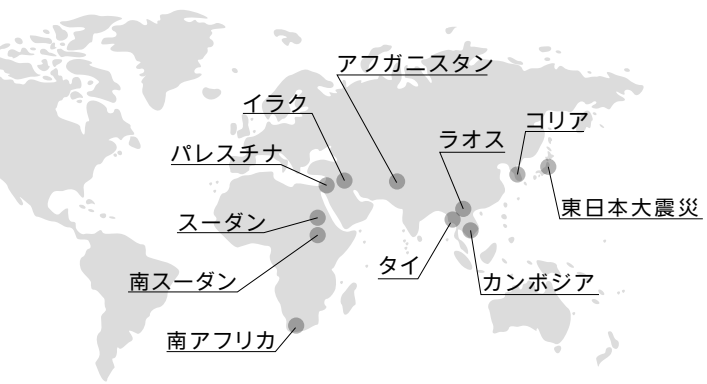
この葉っぱに「こどもが平和をつくる」と書いた平壌の子どもがいます。その全文を紹介します。

「僕は絵を描くのが好きです。平和を願って今回の絵画展に参加しました。僕たち子どもが、東アジアの平和のためになるなんて、とても嬉しいです。みんなで平和のため、絵画展にがんばって参加しましょう」

現在4年生の彼の初めての絵画展参加は2年生のときでした。そのときは、自分の代わりに東北アジアを旅する等身大自画像を制作しており、彼が参加していたグループは、日本から渡航した朝鮮学校の生徒がモデルになり、北朝鮮の制服を着た男の子の自画像が完成しつつありました。その中で、グループの女の子が「金メダルをかけたい」と提案しましたが、彼は「この制服に金メダルは似合わないから嫌だ」と反対し、しまいには泣き出してしまいました。そんなエピソードを持つ彼が、今回、「こどもが平和をつくる」と書いたことの意味は大きいと思います。

子どもたちに自分が参加している活動の意味を繰り返し説明することで、私たちの想いはきちんと子どもたちに伝わり、彼らはそれが「平和につながる」「自分たちがその中心にいる」ことを理解するのだと実感し、あらためて、ともだち展の活動に自信をもてるようになりました。

おりしも「ほほえみ外交」が話題の昨今ですが、ニュースからは見えてこない、普通の子どもたちが描く日常を見ることでお互いをもっと知り、ひとりでも多くの人が相互理解への第一歩を踏み出せるよう、ともだち展は願っています。



JVCは現在、11の国・地域で活動しています。

プロジェクト一覧

12月後半～3月前半

コリア

絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

東京展会場では、「大きく育てみんなの木」と題して
各国の子どもたちが葉っぱ状の紙に書いたメッセージを展示した

南北朝鮮、中国、日本そして在日コリアンの子どもたちの絵画とメッセージで構成される『南北コリアと日本のともだち展』は、今年17年目を迎える。12月22日～28日に埼玉県浦和市で「さいたま展」、2月16日～18日には東京都千代田区で「東京展」が開催された（本誌12ページ参照）。

東京展は、平昌オリンピックの時期に重なったこともあって、新聞やテレビの取材を多く受けた。366人の来場者の中からは「テレビのニュースを見て来た」「このような展示会があることをもっと早く知りたかった」などの声も聞かれた。会場では「わたしの楽しい時間」をテーマに絵画150点を展示。ギャラリートークとして、訪朝団の一員である平和研究者の水本和実さんによる報告と、2013年の訪朝団に同行し、その後も訪朝を重ねて取材を続けるフォトジャーナリスト林典子さんの講演を行った。

オリンピックを契機に南北の対話ムードが高まり、首脳会談の開催が決まるなど、情勢は大きな変化を見せる一方で先行きの不透明感も強い。「国と国の関係がどうあっても、市民による顔の見える交流が大切」という絵画展のメッセージは、メディア掲載も含めて一定の発信をすることができた。今後も情勢を見守りながら交流を継続していく。（今井）

タイ

日・タイ経験交流

タイでの「生活協同組合・市民農園・自立した地域つくり」の実現を目指して、タイNGOスタッフや若手農家などを参加者として、過去2回（2016年、2017年）の日本研修を実施した。そのまとめと来年度の計画を立てるため、2月にタイの持続的農業財団(SAFT)と会議を持った。都市と農村を結んで安全な食を届ける活動として、当初は日本と同様の生協の設立をイメージしていたが、日本研修と分析からタイの民族性や現状況に適してないと判断し、「自立する地域を目指したソーシャル・エンタープライズ」という形をつくりあげる案があがった。研修の学びと経験から新しいアイディアが柔軟に出された会議となった。

（下田）

イラク

ヨルダンでパートナー団体と会議

キルクーク市のラパリン地区にある、JVCの現地パートナー団体INSAN（インサーン）の事務所を利用して昨年8月に開催した、国内避難民の子どもたちと受入れのコミュニティの子どもたちを対象とした平和や共生について学ぶワークショップについてのヒアリングと、2018年度の計画についての会議を隣国ヨルダンのアンマン市内で実施した。昨年キルクーク市で起こった軍事衝突以降、現地は予断を許さない状況が続いており、イラク政府への登録が無いNGO団体は活動ができない状況にある。ただ、このまま状況が落ち着けば2018年度もこれまで同様にワークショップを実施する予定。特にファシリテーターの育成にも力をいれる。（池田）

南スーダン

国内避難民キャンプでの支援

政府と反政府勢力との間で12月に結ばれた暫定的な停戦合意は無視され、各地での衝突が続いている。食料難と合わせ、400万人を超える難民・国内避難民が安心して故郷に戻れる見込みはない。

引き続き、首都ジュバ郊外のマンガテン国内避難民キャンプで活動中。1月にキャンプ内の小学校300人の児童にノートなど学用品を配布。3月には自分たちで少しでも生活を支えられるよう、家庭菜園づくりを行う女性100人（一部男性含む）に農具と種子、ジョウロなどを支援した。雨季が始まる4月にはオクラ、モロヘイヤなどの種まきが行われる見込みである。

3月、ジュバ市内にJVC事務所を開設した。（今井）

パレスチナ

若者のレジリエンス向上事業／栄養失調予防事業

生徒による環境保全キャンペーンでは、エコバッグを下級生に紹介することを通してプラスチックの消費削減の大切さを伝えた。写真はエコバッグに思い思いのデザインを施す下級生たち

◎若者のレジリエンス・地域保健の向上事業（東エルサレム）：プロジェクト最終年度に入った。19校で保健委員会の生徒へ「環境保全」と「高度救急法」のトレーニングが実施され、5校で生徒による「健康的な生活」と「環境保全」の啓発キャンペーンが実施された。次の小規模プロジェクトに関して、地域住民との話し合いを始めている。提携団体（MRS）のスタッフは心理社会的ケアのトレーニングを受講した。

◎栄養失調予防事業（ガザ地区）：次期プロジェクトの開始に向け、提携団体（AEI）とUNICEFと協議を実施し、次年度もUNICEFと前年度同様のプロジェクトを実施することが決定した。

◎アドボカシー：12月の米国による「エルサレム首都発言」を受け、JVC独自で日本政府への要請文を送付し、AIDAの声明（対米国）に賛同した。また、駐在員による帰国報告会を一般向けに2回行い、エルサレムの状況を現地でのインタビュー映像、テレビ電話中継を用いて伝えた。

（山村）

スーダン

紛争による避難民の支援（南コルドファン州）

家庭訪問の様子

2016年から開始したカドグリでの出生登録支援は3期目に入り、新たな地区での活動を開始した。住民リーダーとの協議、出生登録の必要性についてわかりやすく説明するために寸劇や講話を組み合わせた啓発イベントを実施し、多くの母親世代の女性の参加がみられた。支援対象となる児童をリストアップするための家庭訪問を開始している。

また、出生登録を得た児童の就学機会拡大のため、小学校教室棟の増設を進めている。1月に着工した1校の校舎増設工事が完工（1棟3教室）。今後、その他の対象校について、住民リーダーや学校、現地行政とも協議のうえ選定を行う予定。

給水支援では、カドグリからの帰還の動きがみられるリフ・アシャギ郡において、給水施設の状況調査を行った。多くのハンドポンプ井戸の修理が必要であることが判明したため、1月に既存の井戸3基の修理を実施した。また、同月に各集落で住民が組織する井戸管理委員会のメンバーを集めて技術研修を実施、3月には運営管理や井戸修理などについての経験を共有するワークショップを開催した。（小林）

南アフリカ

HIV陽性者支援（リンポポ州）

青少年らの家庭菜園づくりも定着。今はメイズやカボチャなど夏季の作物を植えている子が多い

2017年度はHIV/エイズ関連事業の5年目で最終年にあたる。村の子どもケアセンターのボランティアとセンターに通う10代の青少年約100名を主な対象として活動してきたが、昨年実施した事業評価で、目指してきた成果がほぼ達成されていることが確認された。これを受けて、今後は、若い世代の意識・行動変容をもたらした、家庭環境が困難な状況下にある10代の青少年らとの活動（HIV/エイズ、人権、家庭菜園づくり、リーダーシップ等の研修）の成果を周辺地域に伝えていくことを考えている。1～3月に、周辺の関係団体のリソースパーソンやソーシャルワーカーへのインタビューや情報収集・調査を開始した。2018年度上半期に準備、下半期からの活動開始を目指している。

並行して、現事業下の活動として子どもケアセンター、家庭菜園を定期的に訪問、モニタリングを実施した。

（渡辺）

ラオス

農業・農村開発／土地森林保全事業（サワナケート県）

活動候補村調査では、衛星写真を使って村と村との境を把握する

新規プロジェクトのMoU（現地政府との活動契約）の申請作業を進め、3月に行政に提出した。並行して、活動対象である2郡で活動候補村の調査を進めてきた。こうした調査で得られる各種のデータをとりまとめて分析する手法に関する研修をスタッフに対して実施。その上で、2月に活動村選定会議を全スタッフで行った。村での聞き取りや観察から得られたデータ、衛星写真や地図、統計データから各村の状況を位置づけ、最終的に2群5村ずつ計10村を活動村として選定した。また、村人の生活や社会全体の持続的発展に貢献するための法律・政策に関する活動の基礎として、森林の法制史を読み進める作業を担当スタッフと行った。

1月に現地代表平野が退職、後任の岩田（3月まで気仙沼事業統括）が2月に、東京事務所ラオス事業担当の木村とともに現地に出張し、政府およびスタッフへの挨拶を行った。あわせて、現地駐在員の山室を含めた3名で活動方針や実施体制について議論した。また、NGOそしてJVCの役割とポリシーについて全スタッフと共有する場を持った。

（山室）

アフガニスタン

地域保健活動／
平和活動
（ナンガルハル県）

FHAG活動において、これまで担っていたJVCの役割を、FHAGのメンバー自身が担うようになってきている

村の女性たちが家族健康アクショングループ(FHAG)のメンバーとして月に一度集まり、病気予防や安全な出産などの保健の知識を学び合うとともに、それを周りに伝える活動が順調に実施された。フズバーグ村とクズカシュコート村ではFHAGの呼びかけによって、村の通りの清掃活動が実現し、ゴレーク村ではFHAGが地域の各家庭から少額を徴収し、ゴミ処理を労働者に依頼するという働きかけが見られた。また、いくつかの村では文字の読み書きができるFHAGのメンバーが自主的に女子校の校長に掛け合い、学生に向けて休み時間を利用してマラリア・下痢・結核・妊娠中の注意などをテーマとした保健教育を行った。自発的な女性の活動として大きな成果である。

女性たちが集まるFHAGの定例会では、家庭内での揉め事の解決や子どものしつけといったテーマについて話し合うことで、並行して進めている対話を通じた平和構築プロジェクトの要素も取り入れた。2月にFHAG活動に対するJVCの直接支援（講師派遣や衛生キットの配布）は終了したが、そのあともメンバーが自主的に集まり、学び合いが続いている。（加藤）

気仙沼

鹿折（ししおり）地区での
復興支援

3月18日に開催された「感謝のお別れ会」で、浦島地区振興会会長から感謝状を受け取る気仙沼事業統括岩田(写真左)

浦島地区の地域活性化に取り組む一般社団法人の設立について、設立時社員になることを希望した住民有志5名と共に準備を進めてきたが、少人数で個々の業務負担が大きくなることが懸念されたことから、2017年度内の法人設立は見送ることとした。一方で、住民有志には今後も外部者との交流事業を継続して行う意思はあるため、その活動主体として、任意団体「うらしま交流事業有志の会」を立ち上げることが決定した。4月1日の発足に向けて会則等の準備を進める。

これまで約40回に渡り防災集団移転のアドバイザー派遣を行ってきたが、3月17～18日にその最終回となる派遣を実施した。3月18日には、防災集団移転団地内に再建された集会所「大浦公会堂」にて、3地区の防災集団移転協議会と浦島地区振興会との共催で「感謝のお別れ会」が開催され、6名のアドバイザーとJVCに対して感謝状と大漁旗が贈呈された。

JVC気仙沼事務所は3月末で閉所し、気仙沼での7年間に渡る活動を終了する。皆様にはこれまで多くのご支援をいただき、感謝の念に堪えない。

（横山）

南相馬

災害公営住宅での
サロン運営

引き続き原町区の大町災害公営団地での住民主導によるコミュニティづくり支援（サロン運営）を継続している。1月には孤独死防止の先進事例である千葉県松戸市常盤平団地地区社協の大嶋愛子会長を南相馬に招き、研修会を開催した。地元の社会福祉協議会や県社協、NPOらなど50人以上が参加。住民主体での自治会作りや支えあいのシステム作りについて実践的な研修を受けた。

JVCが支援する大町災害公営団地の「大町きらきらサロン」は今年1月に開設2周年を迎えた。2周年を記念したイベントが住民自身で開催され、80人以上の住民が参加した。住民間でもサロンの役割が浸透し、運営体制が安定してきている。

（白川）

カンボジア

農村における生業改善支援／
環境教育／試験農場

食品加工研修を1月に実施、28人が参加。他村で実施した食料加工研修のフォローアップを行ない、チェーク村では75%の参加者がライムの酢漬けを始めるなど、少しずつ成果が現れ始めている。また、食用多年樹を紹介・普及するための料理コンテストを1月に実施、28人が参加した。参加者へのインタビューから、70%が食用多年樹のチャヤ、モリンガ、アメマシバの栽培を始めていることが分かった。

プノンペンに開設していた農業・農村開発関連の書籍を揃えた人材育成の場（TRC）は、インターネットの普及もあって2年間に渡り利用者数が激減していることを踏まえ、JVC独自運営を終え、大学等の教育機関への移管を検討し始めた。（下田）

調査研究・政策提言

外務省・JICAとの政策協議／
各種提言

◎NGO・外務省定期協議会2017年度　第3回ODA政策協議会（3月1日）：谷山・渡辺が参加。
◎2017年度第3回NGO-JICA協議会（12月14日）、第4回（3月15日）：長谷部が参加。
◎2017年度第3回NGO-外務省連携推進委員会（2月25日）：今井が参加。
◎モザンビークのプロサバンナ事業に関して、昨年11月に発表されたJICAの審査役による調査報告書の内容が、現地の状況を適切に反映していないものだったことから、これに抗議するための声明を他NGO4団体ともに12月下旬に提出した。

（渡辺）

JVC STAFF

去年一番の思い出を教えてください。

東京事務所

前列左から:仁茂田、石川、ガムラ、谷山、長谷部、渡辺、菊地、稲見
後列左から:中野、伊藤、細野、小野山、宮西、木村、並木、小林、中原

左列上から:磯田、下田、山本
右列上から:今井、横山、加藤

谷山 博史 代表理事
人前で三線デビュー。1回目どん底、2回目大恥、3回目ヘタ自覚。でもめげていないこと。

磯田 厚子 副代表/非常勤
(コメントなし)

長谷部 貴俊 事務局長
カンボジア駐在の間に昔お世話になった旧友や先輩に再会できたこと。

細野 純也 事務局次長
アマチュアサッカー関連情報のサイト公開と観戦に没頭。日本代表よりも楽しい。

木村 茂 ラオス事業担当
3月に長男が生まれたこと。もうつかまり立ちし、狭い家中を動き回っています。

下田 寛典 タイ事業担当
長男が卒園式で歌ってくれた「ありがとうの花」で涙腺が緩んだこと。

渡辺 直子
地域開発グループマネージャー/南アフリカ事業担当
出張時、愛猫7匹の世話をしてくれた友人・知人・スタッフの温かさ。心の底から感謝。

今井 高樹 人道支援/平和構築グループマネージャー
12年ぶりに日本での生活に復帰。通勤時間ゼロだった駐在生活が懐かしい…

小野山 亮
アフガニスタン事業現地統括
インド出張中、町の食べ物屋さんで久しぶりのタミル語の会話!

加藤 真希
アフガニスタン事業担当
メキシコの先住民族の村で、女性たちに主食トルティーヤの作り方を直伝してもらったこと。

小林 麗子
スーダン事業担当
5歳の息子が覚えたての平仮名で「まま いつもありがとう」と書いた手紙をくれたこと。

ガムラ・リファイ
イラク事業担当
世界一番優しい人と結婚し、シリアの家族とパナマの義母とブルガリアで休暇をとった。

中野 恵美
イラク事業補佐/非常勤
PTA女子ソフトボール部入部6年目にして初スタメン、初ヒット。試合は負けたけど。

並木 麻衣 パレスチナ事業
昨秋、双子女児を無事に出産しました! すでに同い年のガザ男児とのお見合い予約が…。

山本 恭之 人道支援/平和構築グループ担当
遠距離恋愛を2年半続けてきた最愛の女性と婚約しました。今年5月に入籍予定です!

菊地 真歩 KOREAこどもキャンペーン事務局(出向)
初めて韓国に行って、今までSNSで連絡を取っていた現地の友人に会えたこと。

横山 和夫 震災支援担当
気仙沼事務所へ異動したこと。夏は涼しくて快適でしたが、冬は想像以上の極寒でした。

宮西 有紀 広報/ファンドレイジンググループマネージャー
グローバルフェスタで雨が降らなかった! ひとり旅が晴れだった! いよいよ「雨女」脱却!?

仁茂田 芳枝 広報
アフリカに旅行に行ったこと。ヴィクトリアの滝やサファリ、素晴らしかった!

石川 朋子 コンサート事務局
訳あって口紅の色を変えた日。「何か変わった。かわいいなぁと思った」と言われ有頂天。

伊藤 圭 収益事業担当
車、パソコン、プリンター、カメラ、電子レンジ、フードプロセッサー、ポットが壊れた。

中原 和江 経理担当
北海道北部自転車旅ができたこと!礼文島では長男がサイクリングに付き合ってくれた!

稲見 由美子
経理担当/労務担当
『千と千尋の神隠し』のモデルとなった温泉宿に泊まれたこと!!

カンボジア事務所

大村 真理子 現地駐在員
長年苦楽を共にした前職の上司と後輩が結婚、式でスピーチを。胸がいっぱいでした。

チャン・ポク
フィールドスタッフ
愛らしい娘が元気に成長していること。

チャン・レスミー 経理
家族と、「2018年に他のアジアの国に旅行に行こう」と夢を語らったこと。

ミエン・ソマッチ
フィールドスタッフ
村の農家さんと楽しく過ごせたことと、家を新築したこと。2人の子どもの成長。

プム・ブンルーン
ドライバー
家を建てる準備が進んでいること。

ヘン・チェンガウ 総務
日本人が来て職場環境が改善したことと、妻との結婚7周年を幸せに迎えたこと。

パオ・リッツ ドライバー
運転業務の合間の、JVC農場での野菜試験栽培、堆肥や薬草づくりの補佐がとても楽しい!

イン・コック・エン 司書
事業地の村の長老が語る村の歴史を資料にし、若い世代に伝える手伝いができたこと。

ポーク・コン
プロジェクトマネージャー
毎週末、家族と夕飯を囲めたことと、自宅の庭の草花に自分で水やりができたこと。

チン・ブンヒエン
フィールドスタッフ
担当しているJVC農場を訪問者に褒めてもらえたことと、息子が大学を卒業したこと。

パート・ピー
フィールドスタッフ
母の体調が以前よりも良くなってきたこと。

前列左から：大村 真理子、チャン・ポク、チャン・レスミー、ミエン・ソマッチ
後列左から：プム・ブンルーン、ヘン・チェンガウ、パオ・リッツ、イン・コック・エン、ポーク・コン、チン・ブンヒエン、パート・ピー

スーダン事務所

モナ

左からサラ、アフマド、イスマイル、サイーダ

モナ・ハッサン
現地代表補佐
スーダンの内外に住む大家族のために慈善団体を立ち上げたこと。

サラ・モゴ
フィールドオフィサー
仲の良い兄弟が結婚したこと。

アフマド・アルハーディ
フィールドアシスタント
オベイドに避難していた母がカドグリに来たこと。安定してきたようで嬉しい。

イスマイル・ゴマ
チームリーダー
仕事とプライベートの両方で特別な年だった。新しい家庭を築き、夢を叶えられた。

サイーダ・アルファキ
フィールドアシスタント
州の美術展で賞をもらったこと。

南スーダン事務所

左: イサム　右: ナカング

ナカング・クリスティン
プロジェクトオフィサー
ウガンダの実家に戻って3歳の息子と久々に会い、家族そろってクリスマスを過ごせたこと。

イサム・アンドー
プロジェクトオフィサー
長女が難民キャンプ内の幼稚園に通い始めた。「ひとりで市場に行っちゃダメ。誘拐されちゃうぞ」とか、教えるのがタイヘン。

エルサレム事務所

左: 井川
右: 山村

山村 順子 現地代表
初ロシア旅行。米国中心でない世界を見ました
(パレスチナ難民との出会いもあり)。

井川 翔 現地調整員
三浦海岸の岩場から海に飛び込んだこと。
そこで、東京への一極集中に思いを巡らせたり。

在タイ

森本 薫子 タイ現地調整員
ディトックス、2週間達成。炭水化物、魚・肉類、砂糖、カフェイン、酒類、全てなし!

JVC STAFF 去年一番の思い出を教えてください。

アフガニスタン事務所

集合写真前列左から：サビルラ、イザトゥッラー、ラジーク、アガ・グル・パチャ　後列左から：ワハーブ、アジマール、シャー・モハンマド、トラブ・ハーン、ザマヌラ、デラワール　最後列：イサヌラ　1名のみ：ファティマ

アジマール・クラム
教育コーディネーター
母にとって初めての飛行機でインドに行き、まったく異なる文化と宗教を持つインドの人々と過ごすことができたこと。

アブドゥル・ワハーブ
プログラムコーディネーター
武装勢力が和平交渉に応じてアフガニスタンでの戦争が終わり、政府とともに発展を目指せますように。

サビルラ・メムラワル
副代表
親戚に、子どもたちを学業のためにジャララバードへ行かせるよう説得できたこと。平和活動の取り組みにも良い結果が出ていること。

ファティマ・カディム
地域教育担当
女性グループの間で平和に対する啓発活動の重要性が理解され、自分の仕事が評価されたこと。

トラブ・ハーン
ピースアクション担当
昨年はヘクマティヤールがアフガニスタン政府に参加した。今年はさらに和平交渉が進んでほしい。

イサヌラ・ハタック
経理担当
クリケットのワールドカップでのアフガニスタンのチームを観たい。

デラワール 守衛主任
昨年は悲惨な戦闘で親しい友人や親戚を失ったので良い思い出はない。今年に希望を持ちたい。

ザマヌラ 守衛
去年から子どもたちが学校へ行くようになったことは幸せ。私たちの大切な国に平和が来ますように。

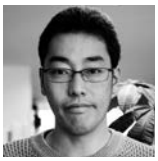
イザトゥッラー 守衛
去年私の息子がアメリカから帰国し、家族で時間を過ごしたこと。

アブドゥル・ラジーク 守衛
メッカ巡礼に行きたい。

シャー・モハンマド 運転手
去年は背中を痛めて医者に手術を受けるよう言われたが、その後、神のおかげで手術をせず回復した。

アガ・グル・パチャ 運転手
私の兄が死に、本当に悲しかった。私の兄弟の子どもたちは孤児になってしまったので、彼らの教育のために手助けをしようと思う。

ラオス事務所



岩田健一郎

オワンティン

岩田 健一郎 現地代表
単身赴任を終えて、ようやく妻と居を構えたこと!(ラオス赴任でまた引越しですが…)

山室 良平 現地駐在員
ルアンパバンに旅行に行き、美しい自然と古都の街並みを見られたこと。

フンパン・センチャントン
プロジェクトコーディネーター
妻、スタッフとともに海に遊びに行ったこと。

ピンマソン・サイシヘン 会計
JVCの一員になれたこと。

ハッタコン・ウォンウィサー
フィールドオフィサー
山に登り、森の中で寝、洞窟で動物の声を聴いて、子どもの頃を思い出したこと。

スィーサワン・インタコン
フィールドオフィサー
母、妻の父とともに魂の結びつきを強めるバースィーの儀式ができてうれしかった。

ソムソン・ドッサニー
フィールドオフィサー
妻が住む村に帰って山の中を歩き、鳥を見て果物を食べたこと。

スクサワット・スィークンムアン フィールドオフィサー
業務外で村人と一緒にお酒を飲んで歌を歌ったこと。

ホンケオ・ドゥォンディー
フィールドオフィサー
タイのチェンマイに研修に行き、素晴らしい友人に会えたこと。

スィーウォン・サイヤペット
庶務
家族とともに両親に会いに行き、姉妹全員も集まって楽しく一緒にご飯を食べたこと。

ホンパソン・タンマウォン
運転手
コンピューターについて自主学習できたこと。

オワンティン・テパウォン
フィールドオフィサー
娘を産んで新しい家族の一員を得られたこと

後列左から：ハッタコン、ソムソン、山室、フンパン、スィーサワン
前列左から：スクサワット、ホンケオ、スィーウォン、ピンマソン、ホンパソン

南アフリカ事務所

左から、ドゥドゥ、モーゼス、フィリップ

ドゥドゥジレ・ンガビンデ
プロジェクトコーディネーター
「アジア学院」の研修。多様性に富んだ世界中の仲間と出会い、ともに学んだ10カ月間。

モーゼス・シャバニ
経理担当
自宅の改装建築の準備が全て整った。「やればできる」と自信がもてるようになった。

フィリップ・マルレケ
プロジェクトフィールドアシスタント
民衆法廷に参加、アフリカの資源・土地収奪等に対し、人権を守る活動を知ったこと。

◎箱や袋などの付属品やギャランティーカード、鑑定書も一緒にお送りください。上記がない場合でも安心してお送りください。◎「お宝エイド」では日本国際ボランティアセンターへ寄付される物品の受取代行をしています。◎お品物が到着した時点で、日本国際ボランティアセンターへ寄付されたものとされ、その後のご返却は一切できませんのでご注意ください。◎宝石などの貴重品は書留、その他の高価なものはセキュリティサービス付ゆうパックをご利用ください。

貴金属・宝石・美術品・骨董品・ブランド品・金券・商品券・切手・記念コイン・古銭・古紙幣・カメラ・時計・携帯・タブレットなど…

～「お宝エイド」ご協力のお願い～

ご自宅で見つけたお宝が

JVCの活動に役立てられます！

会員の皆さんの家に眠っている使わなくなった貴金属類やコイン・カメラ・時計などを、JVCの活動のために役立てることができます。それが「お宝エイド」です。
「お宝エイド」に物品をお送りいただくと、買取額に10％上乗せされた金額が、JVCへ寄付されます。いただいたご寄付は、JVCの活動に役立たせていただきます。2017年度は約230万円集まりました。捨てる前にぜひ！ ご協力ください。

「お宝」寄付を送る方法

Step 1 お宝を梱包します。

壊れたり汚れたりしないように、新聞紙などの緩衝材と一緒に入れて梱包してください。小さいものは封筒でも大丈夫です。

Step 2 集荷依頼の電話をする。

日本郵政（**Tel：0800-0800-111**）に電話をし、集荷依頼と着払伝票をもらいたい旨を伝えます。

無料集荷番号
0800-0800-111
年中無休AM8:00 ～ PM9:00

Step 3 伝票を書き、発送します。

郵便局の方が自宅に来られたら、伝票を受け取り下記の通りに記入します。荷物に伝票を貼り、配達員にお渡しください。

ダンボール5箱以上は直接お引き取りに伺います。

お宝エイド（**Tel：03-5719-6665** 年中無休 10:30～19:00）までご連絡ください。日時を決め無料で玄関先までお引き取りに伺います。
※東京・神奈川・千葉・埼玉のみ

着払い伝票の書き方

右記のように
お届け先と品名を
記入してください。

お届け先	1530063
	東京都目黒区目黒3-8-10
	お宝エイド受付センター
	JVC宛「お宝エイド」 様
	03（5719）6665
品名	JVC宛「お宝エイド」

品名に「JVC宛『お宝エイド』」と忘れずに記入してください。

支援先・寄付の使われ方については？

特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター（JVC）
〒110-8605　東京都台東区上野 5-3-4
クリエイティブ One 秋葉原ビル 6F
TEL: 03-3834-2388　FAX: 03-3835-0519

こんなもの送っていい？や発送方法については？

〈東京都公安委員会 第 303311208397 号〉
お宝エイド 受付センター
〒153-0063 東京都目黒区目黒 3-8-10
TEL: 03-5719-6665

OTAKARA recycle SPOT

「お宝エイド」はTMコミュニケーションサービス株式会社の登録商標であり、実用新案届け済み事案です。

イベントあらかると 1月～3月

いべんと・ピックアップ!

2/17（土）山梨・韮崎市

祖国に平和を取り戻す!
～アフガンの村に生きる医師の挑戦～

アフガニスタン事業担当　加藤 真希

講演中のワハーブ。穏やかな物腰で淡々と自らの人生を語ってくれた

民間人死傷者数が過去最悪という「慢性的な人道危機」が続くアフガニスタンから、JVC現地スタッフのワハーブが来日し、JVC理事の一人が住む山梨県韮崎市の穴山町で報告会を開きました。ワハーブも現在農村部に暮らしているので、まぢかにそびえる山々の景色が印象的な穴山町に親近感を持ったようで、東京の喧騒を離れてリラックスしたようでした。今回の報告会では、JVCの活動自体よりも、窮状極まるアフガニスタンにおいて、平和を取り戻すために公共サービスの届かない農村部で住民自身が推し進める地域活動をサポートしている一人のアフガニスタン人の人生を広く知らせたいと、ワハーブ自身の個人的な体験談を話してもらいました。

1974年に生まれた彼は、ソ連侵攻の時期に難民として隣国のパキスタンに逃れました。3歳のときに父親がソ連軍に連行され、今も行方不明となったまま生存確認さえできていません。難民となって祖国を離れたこと、その後に帰還民として戻ってきたこと。どちらも、それまで築いてきたもの全て――家も家財も人間関係も夢さえも――を捨てて、何が起こるかわからない土地に強制的に移り、ゼロから生活を立て直すということ。それがどれだけ過酷な経験であるかは、私たちの想像を絶することです。ワハーブは淡々と語っていましたが、過去の自分自身の経験と同じ状況が今なお続いていることへの憤りと悲しみが伝わってきて、通訳を務めた私の声も震えてしまいました。

今回の講演の中で、ワハーブは『これは自分だけの話ではなく、何百万ものアフガン人が、自分と同じような、もしくはさらに厳しい経験をしてきた。戦争で被害を受けるのはそこに生きている私たちだが、一体誰がその戦争を続けているのか』と何度も訴えました。一人のアフガン人の体験を通じて、いかにアフガニスタンという国が長きにわたって他国による政治的・軍事的な介入に翻弄されてきたか、そして国際社会として何をすべきかを考える場となりました。それは、その後に皆様からいただいたたくさんのコメントや質問からも感じ取れました。

16年の秋にも別の現地スタッフが今回と同じ場所をお借りして講演させていただいたことがあります。故郷のアフガニスタンの村と穴山町が姉妹都市になれたらいいなとコメントした現地スタッフ同様、私もこのご縁をいつかそのような形に紡いでいければどんなに素敵なことだろうかと夢を持ちました。

その他の主なイベント

1/13(土) 北海道札幌市
北海道国際協力フェスタ20周年記念イベント“国際協力”って何?

1/16(火) JVC東京事務所
パレスチナ駐在員一次帰国報告会
2017年12月のトランプ米大統領による米国大使館のエルサレムへの移転発表に端を発する混乱に関して、現地駐在員による報告会を開催しまいた。本誌10ページも参照。

1/17(水) 東京都台東区
報道されなくなった南スーダンの今

1/19(金) 福島県南相馬市
孤独死を防ぐ 常盤平団地「孤独死ゼロ作戦」の現場から
千葉県松戸市で孤独死防止対策に取り組んでいる常盤平団地の地区社協の方を南相馬市にお招きして、情報共有の場を設けました。

1/26(金) 東京都渋谷区
トークイベント 国境を超え、世代を受け継ぐNGO

2/1(木) JVC東京事務所
映画上映会『ソニータ』

2/3(土)、7(水)、16(金)、24(土) JVC東京事務所
2018年度JVC東京事務所インターン説明会

2/3(土)～2/4(日) 大阪府大阪市【出展】
ワン・ワールド・フェスティバル

2/16(金)～2/18(日) 東京都千代田区
第17回南北コリアと日本のともだち展
本誌12ページ参照。

2/17(土) 山梨県韮崎市
祖国に平和を取り戻す! ～アフガンの村に生きる医師の挑戦～
本誌21ページ参照。

2/17(土) 東京都文京区
僕が銃を捨てた理由 ～アフガニスタンに平和を取り戻すために～
JVCのアフガン人スタッフが、かつて銃を手にとっていたがJVCで働くようになって対話の力を信じるようになったことを、自身の体験としてお伝えしました。

2/18(日) 大阪府大阪市
JVC現地スタッフ来日イベント ～アフガニスタンに生きる医師の挑戦～

2/24(土) 東京都文京区
第121回市民憲法講座 国際NGOの現場で考える憲法第9条

3/2(金)、3(土)、24(土) JVC東京事務所
JVC合唱団員募集説明会

3/7(水) 新潟県上越市
カンボジア農村の今 ～国際協力の現場からの視点、新潟の山村からの視点～

3/8(木) JVC東京事務所
映画上映会『コスタリカの奇跡』

3/11(日) 東京都江東区
東日本大震災チャリティバザー& 思いを馳せる集い

3/17(土) 東京都品川区
映画『ソニータ』上映& アフガン風お茶会トーク

3/18(日) 東京都千代田区
IRAQ DAYイラク戦争が世界にもたらしたものと日本の現在地を考える1日

3/21(水・祝) 広島県広島市
紛争地から見える9条の価値

3/21(水・祝) 東京都新宿区
映画『変身 − Metamorphosis』上映会

3/23(金)～3/25(日) 大阪府大阪市
第7回 南北コリアと日本のともだち展 大阪展

3/24(土) 東京都港区
シリア人の声をつなぐ ―危機発生から七年、私達に求められる役割―

JVCなひと

自分の専門分野で国際協力を！

JVCラオスボランティアチーム
小笠原 房男

私がJVCに関わるようになったのは、1993年に参加したラオスのスタディーツアーからでした。以前から東南アジアには興味があり、なんとか現地の生活を知る方法はないかと探していました。というのも、興味のきっかけは私の祖父が太平洋戦争中にミャンマーで亡くなったことを調べていたからです。色々と調べていくうちに今も続いている悲惨な状況を知り、少しでも現地の人の役に立ちたいと思い、そうしたNGO団体を探していました。しかし、当時ミャンマーは軍事国家で世界に開かれていなく、現地で活動しているNGOはほとんどありませんでした。ミャンマーにこだわらず視野を東南アジアに広げた時、当時インドシナ諸国で広く支援していたJVCの存在を知ったのです。

初めての海外という事もあって、そのスタディーツアーでのカルチャーショックが大きく、また大変感銘を受けました。貧しいながらも穏やかで温かいラオスの人たちに魅了され大好きになり、それからというものJVCのラオスボランティアチームに参加するようになりました。当時美術科の学生だった私はよくチラシや小冊子を作っていたため、JVCからもチラシ制作をお願いされたり、他団体から看板や口ゴマークの制作依頼もありました。今にして思えば、グラフィックデザイナーになるきっかけだったと言えます。少しでも多くの人にチラシを見てもらって関心を持ってくれるように、なるべく人々の目に留まり、わかりやすいデザインを心がけてきました。その経験からか、デザイン会社に就職することができました。

社会人となってからもJVCに関わり続け、08年には青年海外協力隊の美術デザイン科の講師として中国に赴任、自分の専門分野で国際協力に貢献していきたいという思いがかないました。その帰国直後にリーマンショックもあり、一時期JVCから足が遠のいていましたが、今でもラオスチームに参加しています。デザインという一見国際協力に無縁な感じですが、広告で多くの人たちに知ってもらいJVCの活動に多くの賛同者が増えるよう、今後も支援の一端を担えればと思っています。

おすすめ本

『非戦・対話・NGO』

大橋正明、谷山博史 他編著／新評論
2017年12月初版 2600円（税抜）
代表理事 谷山 博史

憲法9条改憲の発議がいよいよ日程に登ってきました。戦後72年経って今、私たちは放棄したはずの戦争に向かうのか、踏みとどまって憲法9条を実質化する道を選ぶのかの岐路に立たされています。秘密保護法、安保法制、「共謀罪」法と、私たちの人権と生活の基盤を根底から覆しかねない重要法案が、十分な審議もなされぬまま私たちを縛る法律と化しています。このこと自体が今の日本の異常さを物語っていようです。

JVCは2014年の集団的自衛権を容認した閣議決定以来、安保法制に反対の立場で政策提言を行ってきました。15年7月にはNGO非戦ネットをNGOの有志と立上げ、平和憲法をもつ国のNGOの立場から軍事優先の国の安全保障政策に対峙する運動を展開してきました。しかし、そうした声が、自分たちが培ってきた現場の知見、思考の深さを伴って本当に伝わってきたであろうか。「共生」と「対話」それ自体を価値とするNGO活動の意義を、私たちはもっと自分たちの生に引き寄せて語り継いでいくべきではないのか。そうした問いを自らに課した者たちが集まって本書は生まれました。

本書では、紛争地での人道支援や政策提言、原発や核廃絶、TPP、沖縄、アイヌ、開発教育などさまざまな分野の第一線で活動している者たちが、分野と世代を超えて引き継いでいくべき非戦の意味を、自分史と関連づけながら問うています。一市民として、日々何を感じ、何を見つめようとしているのか、これから先何を為そうとしているかが率直に語られています。スローガンの連呼を超えた、より深い「非戦」への意思を読者の方々と共有するためにこの本は編まれました。

構想から2年、時間と労力をかけてこの書を編み出している間にも、国内外の情勢は急激かつ目まぐるしく変化してきました。そうした中で非戦を語るこの本は、非戦の取り組みが個々の事態や政策に乗り超えられても、決して乗り超えらない思考の深さと射程をもつものとなっていると確信しています。なお本書は国際ボランティア学会の隅谷三喜男賞を受賞しました。

第19回 JVC会員総会のご案内

年に1回、多くの会員の方々と一同に集える場である会員総会を今年も開催いたします。JVCの活動を通して世界各国の課題を共に考える場でもあります。議案書は、別途6月初旬にお送りいたします。

日　　程：2018年6月16日（土）10：00～13：00（予定）
場　　所：渋谷区 東京ウィメンズプラザ 視聴覚室
議　　案：1）2017年度活動報告および決算報告
　　2）2018年度活動計画および予算案
　　3）定款変更
　　4）役員改選

例年と同様、総会終了後の午後に、「会員のつどい」を企画しておりますので、こちらもご参加ください。参加される場合には昼食をご持参ください。

「冬の募金」報告

※指定寄付／無指定寄付すべてを含みます

2017年「冬の募金」へご協力いただき、ありがとうございました！

11月16日～2月28日集計

1,131件　13,164,463円

募金集計

募金にご協力ありがとうございます。
JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。
JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指定先	期間（12～2月）
無指定	18,330,562
タイ	16,500
カンボジア	49,188
ラオス	1,724,469
南アフリカ	1,076,973
アフガニスタン	2,355,779
イラク	318,660
スーダン	84,815
南スーダン	1,477,185
パレスチナ	1,632,517
コリア	44,000
東日本大震災	1,296,298
みどり一本	151,665
東京管理	1,500
調査研究	43,576
コンサート	3,180,317
合　計	31,784,004円

※上表に「季節の募金（夏/冬/春）」も含みます。

人事

入職

山本　恭之
人道支援／平和構築グループ担当（4月1日付）
20歳の頃にフィリピンのスモーキーマウンテンでゴミ拾いをして生活する女の子に衝撃を受け、教育分野からこの世界に飛び込みました。学生団体での活動、青年海外協力隊、他NGOを経て、JVCに入職。大阪生まれ、お笑い育ち。

ガムラ・リファイ
イラク事業担当（4月1日付）
JVCに初めて出会ったのは2016年12月。イラク事業のワークショップ通訳を頼まれた時で、活動の話を聞いて、すごく感心しました。少しですが人の為に役立った事で、やりがいを感じ、イラク事業に関心を持ちました。

菊地　真歩
KOREAこどもキャンペーン事務局（4月1日付）
アジアへの関心があったことや、自分の想いと活動が重なったことから、今まではコリアのボランティアとして携わってきました。韓国ミュージカルを見るのが好きで、突然思い立って韓国に行くことが多いです。

異動

横山　和夫　南相馬事業担当
（気仙沼事務所震災支援担当より：4月1日付）

岩田　健一郎　ラオス事務所現地代表
（気仙沼事業統括より：4月1日付）

退職

橋本　貴彦　スーダン事務所現地調査員（1月31日付）

平野　将人　ラオス事務所現地代表（1月31日付）

池田　未樹　イラク事業担当（3月31日付）

白川　徹　南相馬事業担当（3月31日付）

竹村　謙一　非常勤アフガニスタン事業担当（12月31日付）

南澤　正久　非常勤パレスチナ事業担当（3月31日付）

編集後記

最近、国内のアマチュアサッカーを観ています。国内の最高峰はプロのJリーグですが、そこから数えて5～6番目くらいのカテゴリ。プレーする選手は他の仕事と掛け持ちのアマチュアばかり。プレーのレベルも高くはないですが、プロにはない身近さやプロを目指すプロセスのワクワク感は結構いい。アマチュアでも「サッカーとともに生きられる」、そうした人たちがもっといていい社会にしたい。それこそ、「猫と生きる」人と同じくらいに。

Trial&Error　トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）
2018年4月20日発行（通巻330号・年4回発行）　定価 500円（税込）

TRIAL& ERROR

今年でフィナーレを迎えるJVC国際協力コンサート。その東京公演を担うJVC合唱団の初練習を4月4日に開催した。例年の倍近い192名が参加、賑わいを見せた。古楽界で著名なヨス・ファン・フェルトホーフェン氏を指揮者に迎えての最後の公演、ぜひ年末をお楽しみに。

特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員数（4月1日現在）**合計961名**（正会員535名　賛助会員426名）

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年4回この会報誌と年次報告書をお届けします。
入会のお申し込みや、会員の方の住所変更などは会員担当の宮西まで。

メールアドレス　miyanishi@ngo-jvc.net

- 一般会員　10,000円
- 学生会員　5,000円
- 団体会員　30,000円

それぞれに
正会員と賛助会員があります

JVCのオリエンテーション（説明会）にお越しください

JVCの活動内容をご紹介しています。
お気軽にご参加ください。［事前にご予約ください］

会　場　JVC東京事務所　参加費　無料

第1月曜日　午後7:00〜8:30
第4土曜日　午後2:00〜3:30

ウェブサイト　http://www.ngo-jvc.net/　メールアドレス　info@ngo-jvc.net　Facebook NGOJVC　twitter @ngo_jvc

◎発行 ＝ 日本国際ボランティアセンター（JVC）〒110-8605 東京都台東区上野5-3-4 クリエイティブOne秋葉原ビル6F TEL 03-3834-2388 FAX 03-3835-0519
◎発行人 ＝ 谷山博史　◎編集人 ＝ 大野和興・長谷部貴俊　◎編集スタッフ ＝ 樫田秀樹・細野純也
◎デザイン ＝ 渡部健　◎印刷 ＝ 株式会社ベスト・プリンティング
本誌の記事・写真などの無断転載・複写を禁じます。